



2021年9月13日放送

「第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会 大会を終えて」

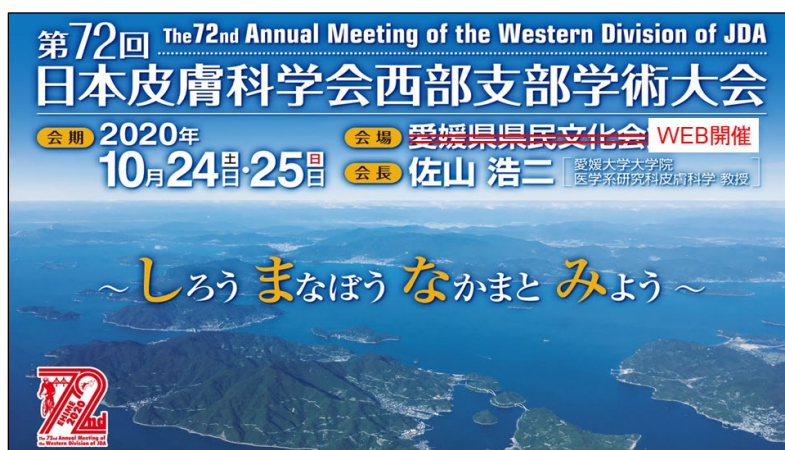
愛媛大学大学院 皮膚科
教授 佐山 浩二

完全WEB開催となった本学会

皆様、コロナ対応では大変お疲れのこととお見舞い申し上げます。さて、昨年の2020年10月24、25日に完全WEBという形で、第72回日本皮膚科学会西部支部学術大会を開催させて頂きました。大きなトラブルもなく、無事終了することができました。多数の皆様にご参加いただき、また運営にご協力頂き大変ありがとうございました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

学会4ヶ月前の昨年6月には、コロナの影響で、史上初めて日本皮膚科学会総会が完全WEBという形で開催されました。その時点では秋には感染状況も落ち着き、懇親会を除けば学術大会そのものにはあまり影響ないと、楽観的に考えていました。しかしながら7月8月以降、感染者数が再び増加し移動が困難になる可能性があったため、完全WEBという形で開催することに致しました。

結果的に、愛媛では7月8月以降の感染者はそれほど増加しなかったため現地開催は可能ではあったと思いますが、他地域から愛媛への持込みが問題となった可能性があったと思います。



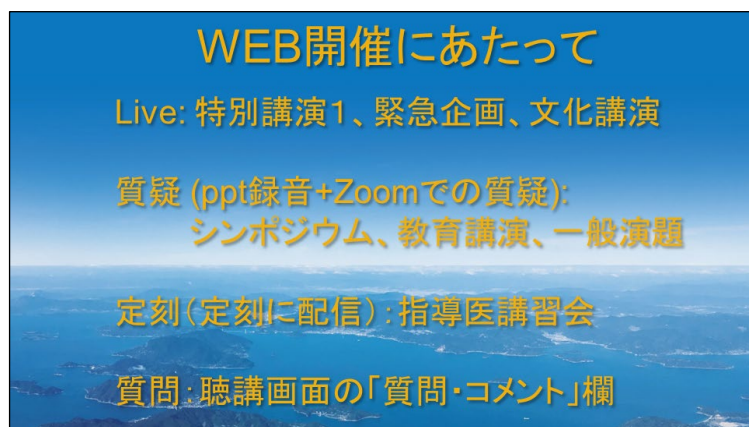
一方、参加者は西部支部大会としては過去最多を記録しました。プログラムが優れていたと考えたいところですが、他にも要因が考えられます。それは従来、なかなか学会に参加できなかった開業の先生、一人医長の病院勤務の先生、あるいはご家庭の事情で自宅を離れられない先生にもご参加頂けたものと考えています。従来は、土曜日の懇親会前の時間帯がゴールデンタイムで、最も参加者が多くなる時間帯でしたが、今回は日曜日の午前中にも参加のピークがあったようです。日曜日の午前中に、感染症学会理事長の舘田一博教授と、今治 FC オーナーの岡田武史氏の Live 講演があった影響はあるかと思いますが、WEB 配信の場合は、日曜日午前中もゴールデンタイムではないかと思っています。自分自身でも他の WEB 学会に参加すると、日曜日の午前中に自宅でゆっくりしながら講演を聴講するのは、なかなか心地よいものです。今後の学会のあり方を変えていくものかもしれません。

メインテーマは感染症、マイクロバイオーム

特別講演は基本的に Live で配信し、またシンポジウム、教育講演、一般演題は事前収録したものを配信し、質疑のみ当日 Live で行って頂きました。講師、演者、座長の先生には、配信時間に待機し、質疑に備えて頂きました。一般演題を中心として、発表者間の質疑が盛り上がったようです。西部支部大会の時には、すでに皆さんがこの方法に慣れてきており、大きな混乱はなかったと思います。

本学会では感染症、マイクロバイオームをメインテーマとしました。コロナに関しては舘田一博教授に、最新の情勢をお話しして頂きました。薬剤耐性の特別講演は、国立感染症研究所の菅井基行センター長にお願いしました。皮膚科領域で分離される黄色ブドウ球菌には、一定の薬剤耐性の傾向があるとのことで、今後の外用剤の使用方法に問題を投げかける講演でした。

さらに皮膚科領域からは、皮膚マイクロバイオームに関する最近の話題を提供して頂きました。残念ながら海外の先生には来日していただくことができず、事前収録を配信することになりました。ドイツの Lars French 教授には薬剤性皮膚障害、英国の Andrew Finlay 教授にはクリニックにおける QOL 評価方法、米国の Anna DiNardo 教授には肥満細胞と皮膚マイクロバイオーム、台湾の Chao-Kai Hsu 教授には次世代型シーケンサーによる genodermatoses の特別講演をして頂きました。



そして実際の診療に直結する、皮膚外科、皮膚病理、薬疹、膠原病、医療倫理などの分野でも、シンポジウム、教育講演などを企画しました。多数の皆様にご参加頂き、大変ありがとうございました。

イメージは「しまなみ海道」

本学会のイメージは「しまなみ海道」とし、ポスター、抄録集の表紙には瀬戸内海の写真を用いました。この写真は私が飛行機から撮影した写真で、伊丹空港からプロペラ機に乗り、松山空港に着陸する直前に見える風景です。

四国は現在3つのルートで本州と繋がっており、そのうち愛媛の今治と広島尾道を結ぶルートが、この通称「しまなみ海道」です。3つのルートのうち、唯一自転車と歩行者が通行可能なのがこの「しまなみ海道」になります。国土交通省がナショナルサイクルルートとして選定したルートで、日本を代表するサイクリングコースです。瀬戸内海に浮かぶ6つの島を7つの橋で結び、自転車だと約70kmの距離になります。このルートの最大の魅力は、瀬戸内海の多島美と巨大な人工構造物のコントラストを楽しみながらサイクリングできることで、「サイクリストの聖地」と呼ばれています。

せっかくの学会ですが、愛媛にお越し頂くことができなかったので、せめて愛媛の雰囲気味わって頂こうと、しまなみ海道の動画を作成しました。私が実際に「しまなみ海道」をサイクリングし、ヘルメットに装着したカメラで動画を撮影して参りました。そして、学会のWEB上に「会長と走るしまなみ海道」としてアップしていただきましたので、ご覧になって頂いた先生もおられると思います。感染状況が落ち着けば、皆様にはぜひ訪れて頂きたいと思います。



当日の配信会場

今回は機材などの関係で、東京からの配信となりました。一人、部屋に閉じこもりパソコンに向かって喋るのは、現地開催の学会とは異なり、また別種の緊張感を伴います。時間どおりに喋り、複数のチャンネルで番組を同時配信していくのは、一種の放送局のようなものだと感じました。また、現地開催の学会と異なり、万が一サーバーにトラブルがあっても自分では何もできません。もしサーバ



一が復旧しないと、学会が流れてしまいます。完全 WEB の学会では、この点が怖いところでは。

通常ならば、学会終了後に医局員全員と集合写真を撮るところですが、今回は事務局長の村上正基先生と学会スタッフ 2 人で寂しく記念撮影しました。配信会場にいたのはこの 4 人のみで、他は配信業者さんという状況でした。

現地開催であれば、2 日酔いも加わり、肉体的にもかなり疲労しますが、今回は配信トラブルがないよう心配して、妙な疲労感が残ったものの、2 日酔いも肉体疲労もなく「やりきった！」という感じがないのは残念でした。愛媛に帰ってからは、感染拡大地域に出張したとして、大学から 10 日間の自宅待機を命じられ、さらにストレスがたまることとなりました。



おわりに

バーチャルな完全 WEB の学会はおそらく昨年度のみで、今年度以降は現地開催に WEB 配信を組み合わせたハイブリッド形式の学会が、当面主流になると考えています。

WEB 学会は講演を聴講し勉強する分には、非常に優れていると感じています。一度 WEB 配信の利便性を体験してしまうと、これがなくなることは考えられません。感染状況が落ち着いても、当分この流れが続くのだと思います。

しかしながら、人と人の繋がりが断たれてしまうのが、今後の課題だと感じています。現地開催の学会であれば、細かい点や講演では喋りにくい点なども、直接質問することができます。さらには学術的な面だけではなく、学会は他大学のスタッフと知り合いになる良い機会になっていたと思います。現在は、まだコロナ前の繋がりで交流を保っていますが、新たな繋がりがなくなり、その影響が今後じわりとでるのではないかと心配しています。

それでは、コロナの状況が一刻も早く落ち着き、現地開催の学会を再開できることを祈念して、話を終わらせて頂きます。